
春に降る雪

神狩アイ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春に降る雪

【Nコード】

N8904I

【作者名】

神狩アイ

【あらすじ】

——好きになった人には、好きな人がいました。

声をかけたいのにかけられない。断られるのが怖くてメアドも聞けない。偶然をよそおって会ってみても、うまくいかなくて……。

彼の前では笑いたいの、なぜかいつも緊張して顔がこわばってしまふ。

けれど、せめて気持ちだけでも、いつか彼に届いて欲しい。

——ただ純粹に人を好きになった女の子の、まっすぐに一生懸命な

初恋ストーリー。

ひと聞き惚れ（前書き）

ただひたすらに甘くてきれいな純愛が書きたかっただけです。
幼くて、甘酸っぱくて、失敗ばかりでもまっすぐな、そんな気持ち
に立ち戻ってみたいと思います。

ひと聞き惚れ

少女漫画のまねごとみたいな恋愛なんて、現実にはとにかくまずありえないものだと思うていた。

たとえば朝寝坊して食パンをくわえながらダッシュ登校、全力疾走で住宅地の角を曲がったら見知らぬイケメンの男の子とごっつんこして、いってえなこんちくしょうとか言われてすみませんって謝ったら目線がかっちり合って、お互い顔を真っ赤にしちゃって胸ズツキユン、なんていうのは夢物語。はるか遠くのさらにはるか遠く、少なくとも私の知っている現実の範疇じゃない次元のものだと思っていた。

いくら遅刻寸前でも、朝から食パンくわえて走らないし。

せめて口につめこんでもぐもぐさせながら走るっしょ？

そういうもんだ。

目を覚ませ、日本女子。

脳内妄想ジェットエンジンは全開でぶんぶんまわせばいくらでもぶつとぶし、SFだろうが時代ものだろうがなんだろうが、たちどころにご都合主義のアメリカ版リトルマーメイドな魔法にしたがつてハッピーエンドなラブストーリーにしてしまえるのだが、現実とはかくも冷たい。そう簡単に己の恋愛をハッピーエンドにもドラマティックにも微調整できない。

角を曲がったって誰にもぶつからないしぶつかりそうになったらどっちかがギリギリ避けるし、不良にからまれそうになったところをイケメンに助けてもらったりするようなタイミングのいい出来事は皆無。ましてや隣に引っ越してきたイケメンがとか、隣の席になったイケメンがとか、支離滅裂のちぐはぐ没論理。

脳内妄想の領域を出さえしなければいいのにわりとそこらに転がってそうで転がってないものだから、止まってるのにスイングアウトと審判の鉄槌がくだり攻守チェンジ、そんなかんじの冷たい現実

が今ここに私がいる場所であって空間であって。

だけど私は、フロイト先生にさんざか聞いてもひきだせない夢の答えのひとつとして、恋愛感情をあげてもいい。今は。

まんざらでもないその異次元の感情は、子供から大人へと「進級」する狭間の微妙なクレバスをなんとか越えるか、越えられないか、なんていう真つただ中の十五歳だった私の思考回路を完全にフリーズさせるほどには破壊力があつて。誰かにたずねて答えがでるような数式にあてはまるものでもなくて。

どうでもいいことのはずなのに、いつの間にかどうでもよくなくなっていた、なんて。

私、小日向美優が久坂幸人と出会ったのは、そんなクレバスで立ち往生してひーこら言っている十五歳の春と夏のあいだだった。

ゴールデンウィークのていたらくとぐうたら気分をむりやり払拭するように涼しい風が生ぬるい、湿気を含んだずしりと重い空気に変わり、昼夜逆転の溜め録りドラマ消化ウィークと化していた生活を否が応にも学校モードへログインさせなければならなくなってしまう。気分は果てしなくメロウで、こうなったら明日にでも世界を滅亡させてみせると運動会前日の運動オンチな小学生のようなことを一瞬考えたが、さんと元氣よく照りつける太陽は活動極大期にはいるようなこともなく、地球はグラリとも動かない。

地殻変動なんて映画の世界だ。ローランド・エメリツヒは空想の魔術師であると申せましょう。

一九九九年七の月の恐怖の大魔王はただのオカルトだったし、千年の終わりに復活する聖書のサタンもまたフィクションだった。二〇一二年の地球滅亡説に期待する要素もあるまい。

市と市を分かち電車の線路の下をくぐるように半円に掘られた通路、もとい階段をかつんかつんとだらしなく降りていると、真上をちょうど電車が通過してなんとも力タカナでは表現しがたい轟音が鳴る。壁に反響して、反響して、反響しまくって、容赦なく私の耳に暴虐の限りを尽くす。蹂躪される。端からくずれてゆく砂の城のように。

「あーもー、うるさい！」

黄金週間のログアウトの苛立ちときりかえきれない現実ToStrスはずんどこ溜まるばかり。叫ぶと同時に電車は通過しきって、同時にすれちがいざまおばあちゃんがこつちを何事かと見ていて、私はそそくさとのぼりの階段をあがっていった。

あがった先の狭い道を右に折れ、くるくると二周半ほど小山をまわる整備された勾配をあがりきると、そこまできてようやく学校に到着する。なぜわざわざ木々の住宅事情が半端ないちまつとした丘だか小山だかの上に学校など作るのか。

ドラえもんのアニメに出てくる裏山よりは小さいものの、この坂道をのぼりきるには体力の足りてない私じゃかなりのヒットポイントを消費し呼吸するたびに肺が苦しくなるレベルまでおっこちる。これを三年間繰り返し返さなければならぬのかとかんがえると、いっそ卒業できるのかなんて危惧してしまう。

グラデュエーションまでにぶっ倒れるかも知れんのでいつそ保健室に家財道具もちこんで住んでもいいですかと一遍、保険医の先生にまじ顔で質問し、大馬鹿小馬鹿の馬鹿笑いの散々な目に遭った。いわく、「だったら今から三年分ちよつとあの道走ってきなよ、そしたら絶対大丈夫だから」だの「よく人体で一番重い頭をその細っこい首の筋肉でささえてられるよね」だの「死んだら骨拾ってアマゾンの奔流に流してやるから諦めなさい」だの。

「絶対S入ってるよ、あの先生」

なんて文句を言っても友人の広瀬真希嬢はあいもかわらずつつけんどんだった。朝の新鮮な空気がいまだ人間の活動によって汚され

ていない、人の少ない教室で。きらきらと太陽は美しい。今日も銀河系は平和をきわめている。

「だって美優、中学のときの体育、体力測定の日はのきなみ日陰でキノコになってたって言ってたっけ」

言いました。

「そりや無理だ。今どき、病弱で体弱くて運動苦手なんていうのはモテないぞ。はるか昔の少女漫画か萌え系アニメの女の子じゃないんだから」

でも、嫌だ。

「じゃあ諦めることさね。秋の運動会までに毎日五個ずつぐらい逆てるてる作ってたなら、当日には相当な量になるだろうから、呪いを込めて必死で作りなさい。強い気持ちが入ればモノは魂をもつのだよ」

そんな千羽鶴みたいにくまういたら苦労しないよ。

世紀末級に運動神経の悪い、というより身体が固くて運動足りてなくてちよろつと階段をのぼっただけで息がぜえぜえあがつてしまいう貧弱な身で、よくこの学校受ける気になったねと真希に呆れられたことがある。

入試前の学校の説明会で保護者とそろってここに来たとき、有志なのか強制なのかぴしつと制服を着た在校生があつた坂道の両端に等間隔にずらりと配備されていて、「ようこそ白浜沖高校へ！」なんて頭さげて叫んでいて、それがお嬢様気分にしたおかげでるんだとスキップまじりでのぼっていた。

だからあんまり気がつかなかったが、今思えばあれは勾配のしんどさを錯覚させるための作戦だったのかも知れない。

入試でふたたびここに来たとき、そんな百貨店の開店直後みたいな出迎えは当然ながらまったくなくて、ただひたすらうすら寒い勾配をしずかあに、とぼとぼとのぼってきた。それでようやく「ああこいつてそんなすごい坂道だったのね」なんて絶望感すら咀嚼しまくった。

うまい口車にのせられていい気分になってコロリと騙されるやつを馬鹿にしてきたが、これからは迂闊に笑えたもんじゃない。

「それは美優の責任だね」

「分かってるよ」私は口をとがらせてつんと横を向いた。「死ぬ気で三年間を過ごさせてもらいますよう。死んだら幫助しなかった真希のせいにするから」

「あーなんだって？」

「かつて夢見てたはずなんだよね、うきうき高校生活というか、もう死語だけど高校デビューとか」

「確実に死語だ。やめとけ。茶髪にもしてないしピアスもあけてない、一回スカート折っただけの普通ちゃんが」

「普通ちゃんは普通ちゃんなりに夢見てるんだよー」

覚醒するんだ現実に、なんて言って頬をつねる真希。

まぎれもなく、冷たい現実への覚醒はガリガリ君をがじゅりと噛んで口の中で噛み砕くような、鼻先から後頭部までキーンと抜ける強烈な感覚に相違なかった。

はたして茶髪やピアスや短いスカート丈やメイクや巻き髪なんぞに興味も示さない普通ちゃんたる私が、こんな現実で満足しているのもちよつと悔しかった。きっと誰もが変貌を求めているだろう、なんて誰にもたずねたことがないのに勝手に統計をとったような結論でむすび、それに混じらない自分を特異だと思いつつそうじゃないとも思っていて、その淡い矛盾ははからずも、同族嫌悪からはじまったあるひとつの出会いを生むのだった。

戸籍によるとしつかり平成元年の三月生まれで、クラスではたいてい一番遅く、誕生日を祝ってもらうにはちよいと世間の終業式の日取りが早すぎるポイントでほとんどがスルー、学校に来ていきなり「誕生日おめでとー！」なんてクラッカーの洗礼を受けるようなこともまた夢だった。

高校に入ればちょっとは終業式も遅い日取りになってるだろうな
んて一瞬でも思った私が世界一のドアホで、やっぱり期待しすぎた
ものはことごとく絶望へとむすびついてしまうのが世の定めなのだ
ともうこれは人生の教訓にしまった。三月二十三日生まれって
ホント、どうなんだ。世間的に見ればこの誕生日ってどうなの？

クリスマスとかぶってプレゼントを二イベントいっしょくたにさ
れたり、お盆真っただ中だからご先祖様への遠慮を優先されて粗末
なパーティーばかりだったり、国民の祝日で確実に人生終わるまで
学校及び職場で祝ってもらえない日だったり、なんていうものより
この微妙な距離感は何だろう。誰に抗議したらいいんだろう。

学校が変わるたびに「もしかしたら終業式がもうちょっと遅くな
るかも」なんて期待して絶望するんだから、祝日が誕生日になっ
てるよりもなんだか切ない気がする。もうちょっと十月十日を計算
して祝いやすいときに産んでくれと父と母に今さらながら文句が言
いたい。

そんな、誕生日に関するちょっとした話題はクラス替えのたびに
必ずどこかで発生するもので、ある日、数学の授業中にうつらうつ
らと眠気をこらえているときにふと耳に入った男子数人の会話もま
さしく誕生日ネタだったわけで。

「え、お前、四日生まれなの？ 珍しいな」

「だろ。世間的にはまだまだ冬休みだけど伝説の七日間だもんね」

「俺の友達に九日生まれがいてさあ、すっげえ悔しがってた」

「うわ、惜しい！」

「そりゃあ、日本の歴史上何回あるかっていうような日取りだもん
な。俺らの世代って結構レア？」

どんな世代だ、と心の中で突っ込んだがそれよりも頭の中では会
話の中心にいる男子の「俺らの世代って結構レア？」の声が何度も
リピートされていた。

うーん、いい声してる。

別に声フェチじゃないしアニメの声優の追っかけをしてるわけで

もなんでもないんだけど、ただ今すぐにも机に突っ伏して居眠りしたい衝動をこらえてうとうとしてる判断能力のにぶった頭で「いい声してるなあ」と純粹に思った。

やわらかくて、まるっこくて、優しい感じ。

その男子が誰なのか確認するほど頭は覚醒せず、二秒後にはノートと教科書がひらきっぱなしの机に腕を組んで顔を乗せ、めくるめく夢の世界に小旅行に出かけていった。

昭和六十四年生まれ

伝説の昭和六十四年を予測して子供を生んだ親はまずいない。

あの幻のような七日間に生まれた私たちの世代のごく一部の子供たちは誕生日をカミングアウトするたび、昭和六十四年の事情を知っている者から「おおっ」と驚かれる存在で、はからずしも奇異で特質だった。年末に出した年賀状がちょっと無駄になったかなと日本国民の落胆を背負って崩御された昭和天皇は、その七日間を計算していたのか、というのはまず嘘だろうが。

いずれにしてもたった七日間しかない昭和六十四年というものは伝説化していて、通常なら四月から十二月生まれと一月から三月生まれの二年ぶんの誕生日を持つ生徒がひとつの学年に在籍しているところ、私たちの世代は昭和六十三年、昭和六十四年、平成元年と三年ぶん、いる。

けれど数としてはやっぱり少なく、ひとつの学校だったら十人いればいいんじゃないだろうか。きちんと調べたことがないけれど、たった七日間なのだから日本国民全体で考えても結構なレア度だと思う。そりゃ驚いて当然のリアクションだ。

だから、居眠りしていた数学の授業中、うすらばけーとしていた頭で聴きとれた優しい声の男子の会話は、昔からたまに聞く内容と同じで、けれどやっぱり「すごい」と口走ってしまいたくなるものだった。珍しさあまって。

昭和六十四年というものは、日本でいうところのイリオモテヤマネコとかそんな感じなのかも知れない。あそこまでありがたくかわいらしくないのだとしても、普段意識しないがそこにいたらなでなでしてしまう、そんなもんだ。

そんなゴールデンウィーク明けたての学校は生でさばいたマグロ

がたつぷり机に盛られているような状況で、各々が新鮮さを失った安物の赤身となつてぐでんとひっくりかえっている。私も例に漏れず、体力測定の日陰キノコ説を裏切らない脆弱っぷりを発揮してぬるい空気をかるうじて吸い吐きしながらようやく立っている、そんなギリギリの切羽詰まった生活をしていた。

別に夜更かししているわけでも酒を毎晩あおっているわけでもなんでもなくて、単に基礎体力がないだけだ。貧弱め。ときどき自分のていたらくさを呪いたくなる。呪っても自縄自縛なのだからさほど効果はないのだが。

「美優、とつと人間に戻らないとあたしは先に帰っちゃうぞ」

真希になかば雑巾絞りの扱いでしばき起こされて、授業中の小旅行からカムバックする私。木琴の上を妖精がスキップしているような下校チャイムの音。ぺちぺちと頬を手の甲で叩かれてようやく覚醒した。

「ああ、もう帰る時間なんだ」

「横着者め」

「もうさ、窓際の席って車の助手席に似た破壊力を持つてると思うんだよね。反射的に右にステアリングを切ってしまうドライバー心理に則したとおり、交通事故は助手席が一番死亡率が高い。そんな感じで窓際席の授業中居眠り率も、この整然とならべられた四十個の席の中でもっとも危険地帯だと思うんだよね。教壇を正面だとすれば、この位置、まさに助手席じゃん？」

「教室を車に例えるあんたの思考力からしてまだ寝ぼけてんな。よし、私が特別に起こしてやろう」

「いりませんいりませんさあ帰ろう友よ」

ぼへらーとした頭をむりやり現実にはひっぱりこんで、真希の手をつかんで教室を出る。最近、ようやく学校生活に慣れてきて、帰りに駅前のクレープ屋だとかゲーセンだとかに寄る余裕ができた。今日も今日とて「どっか行く？」なんていう予定をつい口にしてしまう。相手の予定の都合を聞く前に。

「んー、ちよつと今月余裕ないからなあ」

「ならば穿きふるしたパンツを売りに行くのだ、都会のと真ん中の怪しいお店に」

「あんたが行けよ、冗談きついな」

「私は絶対バイトしたいって思ってるもん。高校に入ってからやることリストの上位。憧れてたんだよね、バイトで豪遊生活」

「豪遊できるほど稼げないと思う」

下駄箱で靴を履きかえながら、なんともツツコミどころの見つからない会話を繰り返していた。これがラジオでのDJとゲストの会話だったら大いに電波と電気の無駄だ。これぐらいが女子高生の日常としてちょうどいいとは思っていても、第三者からは冷たい目で見られるのだから難しい。

中庭を抜けて門を出て行くと、あの心臓破りのぐるぐる坂道のすぐ入口で、同じクラスの男子数人とすれ違った。「ばいばーい」なんて二人で声をかける。同時に手を振り返した数人の友人たちと、まだ話したことがない男子たち。「おう、また明日」なんて答えてくれた男子たちはすぐにまた固まりはじめ、「でさあ」と会話を再開する。

「久坂、またジャンプ貸してくれよ」

「自分で買えよそれぐらい。二四〇円だろ」

苦笑まじりに答えるその声を、私は聞き逃さなかった。

授業中、寝ぼけた頭で聴いていた、昭和六十四年生まれであることで雑談が盛り上がっていた、あの男子と同じ声だ。

振り返ると彼らはもうかなり遠くまで歩いてしまっていて、到底「ちよつと待つて！」と大声で呼び止めて走って行ってまで話しかけていいような関係ではないし、一瞬やろうとして、やめた。遠くなりすぎて、同じ制服ということもあって、どれがその声の持ち主なのか判別ができなかった。

「どうしたの、美優」

真希が怪訝な表情で私の肩をたたく。男子たちがわらわらと校舎

に消えていったのを見送って、「なんでもない」と言った。

「あの男子たち、いつも一緒だよ」

真希は整備された小山の勾配を、安定の悪いローファーでとことこ降りていった。登校はつらいが下校はさほどでもない。木漏れ日が地面に斑点をいくつもつくる坂道を、私と真希はのんびりくだった。

「もうグループできあがっちゃってるんだよ、たぶん」

「女子は分かるけど、男子ってそんなふうには派閥つくるように見えないんだけど。むしろつるんでる仲間ってところ変える感じ」

「だよ。それが男の友情ってもんなんだよ。男女問わず誰にでも分け隔てなく、ってか」

女子には理解しがたい異文化だ。だからこそ恋愛が成り立つんだろうが。

三分ほどかけて坂道をくだりきり、元のまっすぐな道になった住宅街の家々の合間をぬって駅に向かう。このあたりは比較的田舎で、家屋よりも木のほうが多くて田んぼもちらはら見受けられる。私立の学校とは往々にしてこういう田舎町に建てられるものだ。どうしてだか。

そういえば中学のとき、お隣さんまで歩いて五分、といった田舎のど真ん中にどんっとラブホテルがあるのを海水浴の帰りの電車の窓から見たことがあって、あれはどういう収益を期待して立地を決めたのか先三日ほど悩んだことがある。

私は鞆から携帯電話を出してアドレス帳をはしごしながら首をかしげた。

「そういうわりに私、あんまり男子とメアドの交換してないんだよねえ。私が閉鎖的すぎるだけ？」

「そう思う。美優、ひとり鎖国って感じだし」

「いいけど、別に。数友増やしたいわけじゃないから」

SNSでフレンド数を増やすためにやたらめったら友希しまくる女子が大勢いるが、ああいうことはしたくない。同時に、入学して

数日とたたないうちにちよびつと仲良くなっただけの子とすぐに「ねえねえメアド交換しない？」と気軽に申し込んで申し込んだつきりメールなんてほとんどしない、なんていうクラスの女子のようなことも、しない。

私が淡泊なのかなあ、と一瞬は思ったがすぐに気にならなくなつた。

「それは私も賛同するよ。アドレス帳の登録数見て安心したいほど、何かに飢えてるわけじゃないしね」

「とかいつて真希、こっち入学してメアド交換したの、何人？」

「さあ。五人ぐらいじゃないかな」

「ああ、それちょうどいいと思う。私もそれぐらいだし」

携帯の画面をひらいてみせびらかす。真希は「何がちょうどいいんだか」と苦笑して携帯を小突く。

そついうやりとりはまぎれもない真実だった、のだけれど。

駅に着いて他の生徒にまぎれて電車に乗るころには、あのきれいな声をした昭和六十四年生まれの男子にはメアド聞いてもいいかなと思うようになった。

現実とは、変貌を繰り返す生き物である、なんていう格言を己の中で勝手に作ってみる。

ひとの気持ちなんて川の流れ。いつだつてくるくる、さらさらと、うっかり落ちてきた枯れ葉なんぞを巻きこんで下流へ旅していくものだ。

夏がくれば思いだす

時代はまさに「日本です！」と横断幕で主張しまくった倭国らしい気候である。

六月をジューン・ブライドとして最初にイベント化した人をひっぱりつれてきてぶん殴りたいカップルは大勢いることだろう。

このような、全身から菌類が生えてきそうな気候の国でそもそも結婚式を挙げようなどという行為が無茶すぎるのだ。花嫁衣装というものは往々にして密閉性があり、くそ暑く、通気性にも劣り、かくして赤ん坊のように蒸れて死ぬ思いをするのが毎年の被害状況であろう。知らないが。

それを考慮してるのかしてないのか、十一月二十二日をむりやり「いい夫婦」の日と称してイベントをスライドさせ、あのくそ暑く通気性の悪い衣装に適した、ちょうど肌寒くなってきたかなどうかなという季節に結婚式を上げることが多くなった。

そもそも私は結婚なんてしていないが。

これは従兄が結婚して愛の巣をかまえたとき、たまたま電話番号の末尾が一二二二になっちゃったことで結婚式場からその番号を売ってくださいという電話が殺到したことを機に、私が勝手に妄想と実例を交えて思いついた主張だ。

かくして、いかにも「日本です！」と言わんばかりの季節がまたなしに到来し、私こと小日向美優は現在、絶賛いつものマグロ中。基礎体力が足りないところなる。ゆきおくれた感の残る数学の先生の教科書棒読みにひとしい解説はオルゴールで流れるララバイのようだし、じめじめむしむしと暑くてカビが生えそうだし、だからといって机に突っ伏して寝ようとするとうなじが焼けるのでやりたくないし、あれこれ迷ったあげくに普通に座った姿勢で頭を深く垂れ目をうつすら開ける作戦に出た。

ああ、どうして日本は洗濯物がうまく乾かないようにできている

のだろうか。そんなことをぼへらと考えながら、インクがにじんだようにぼやけてうまく見えない視界の奥の教科書の文字を見つめる。あけはなした窓から風が吹きこんで、長く伸ばしっぱなしの髪を優しく揺らす。その風が少し生ぬるくて、夏がとおくから奇声をあげながらダッシュでこちらに向かっていることをうかがわせた。

春が終わる。悟りをひらいたようにそう思ったとき。

こつん、と額に小さな痛みとともに何かが当たった。机に落ちたのは何重にもおりたたまれたルーズリーフの切れっぱしで、差出人はまぎれもなく、ななめ前の机で真面目に授業を受けているふりをしている真希だ。表におもいつき「美優へ」と書いてある字は真希の筆致である。

半分意識が夢の世界のまま私はぼんやりと手紙をひらいた。

「今日、さやかのお誕生日だから、三人でプリ撮りに行くよ！」
簡潔すぎるあたりが真希らしい。

さやかとは教室を車に例えるところでちょうど上座あたりに席をもつ衣空さやかのこと、真希と同じく高校で初めて知りあった子だった。むしろ真希よりも友達歴が数日長い。入学式の当日だったか翌日だったか、新入生向けの案内プリントを読みながらぼけっと廊下を歩いていたところ、ベタなことに同じことをしていた彼女とほぼ正面衝突をかましたことが出会だった。

「ごめんなさいとかすみませんとかお互いに散々連呼しあったあとに散々笑って、名前を言い合い、同じクラスだということが判明して意気投合、現在にいたる。」

色気のない地味な私と違って、明るい茶色に染めた髪に少しパーマをあてて薄化粧をした、かわいらしい子だ。趣味はお裁縫とお料理、なんていうことはなくて読書と音楽鑑賞、しかも海外古典文学にクラシックというのだから渋い。

「さやか、ハピバー！」

いくら省略がはやってるからってそれはないだろうと文句をつけ

られそうな省略っぷりを発揮して、私と真希は休み時間に上座でひと騒ぎした。やかましいサ라운드システム絶叫を一齐に浴びているさやかは、教科書やノート類をそろえて引出しにしまおうとしている最中で、まさにそのポーズのまま私たちを見上げてぽかんと口あけっぱなしで閉じられない。

両手をバンザイして「さやか、ハピバー！」をやったはいいがさやかの反応がいまいちだったのでそのまま固まってしまい、私は「えーと」で解凍した。

「さやか、誕生日でしょ？」

「え、あ、うん、そうだけど」ようやくさやかも状況を把握したらしく少々慌てぎみに答える。

「でしょでしょ。だから、ハピバ」

「なんなの、その略し方」

案の定、さやかにそこを突っ込まれて思いつきり笑われた。最初にこれを言おうと言いついたのは真希のほうで私に否はない。その意をこめて隣の真希を肘で小突くとチョップが返ってきた。ひどい「そんなわけだから」真希はさやかの肩をむんずと掴んだ。「帰りに記念プリ撮ろうよ。せつかく長い高校生活三年間の初誕生日なんだから、盛大にやらねば」

「えー、ほんとに？ 行こう行こう！」

さやかは小柄な身体でめいっばい喜びを表現してくれてかわいらしい。これで私とほぼ十か月も誕生日が違うのだから笑えてしまう。思えばひとつの学年なんて三月生まれから四月生まれまでいるから、いつどこで学年がひっくりかえって敬語になるかと、そんなのが分からないんだ。一学年違ってもほとんど二学年違うのと変わらなかったり。

誕生日って気にするの、女子だけなのかなあと私はぼんやり思った。

恋占いは、まず誕生日と血液型で診断するものが多い。なぜだかは知らない。

五時間目、六時間目と寝て過ごしてむかえた放課後。

真希やさやかは放課後仕様でスカートをさらに二回ほど折りこんでいたが、女らしさ、化粧っ気、色気のかけらもない私がそんなフエミニンでガリーな所業をやつてのけるわけがなく、毎回さやかに「一回やったら慣れるしやみつきになるよ」と言われて無理やりスカートをいじられそうになったが、毎回ぎゃーぎゃー騒いで断固として拒否している。

どう考えても受験校選択中の女子中学生の心をくすぐるためだろうと一瞬で分かるが、それでも私立ならではのかわいらしい制服なのに、折ってしまうなんてもったいない。

食堂の自動販売機でパックジュースを買い、それを飲みながら小山の勾配をGメン歩きで降りていった。昨日のテレビ番組だの、お笑い芸人のモノマネだの、読んだ本の感想だの、そういったとりとめも脈絡もひとつとしてないガールストークに花を咲かせながら。恋の話があまり出てこないあたり、恋愛体質のギャルとはちよつと違うさばさばした空気がある。

延々と果てしなく続くおしゃべりを展開しながら、田舎町で唯一活気が集まる駅前のおちよつとしたショッピング街へのりこんだ。六階建てのあまり大きくない複合施設、ショッピングモールが駅を中心に半径五百メートル圏内で乱立し、買い物客狙いのデパートや映画館、アパレルショップがならんでいる。

この駅を最寄にしている学生は我が白浜沖高校しかないのです、夕方には同じ制服を着た在校生たちでこつたがえす。都会ほどの規模ではないし、閉まったまま動かない店舗などもあって一部すたれた空気は残っているが、下校途中のわずかな時間を遊びたおすには十分である。

私、さやか、真希の三人はからりと晴れた青空から逃れるように施設内へすべりこみ、迷いなくエレベーターに乗った。このセンタ

一の最上階はフロアすべてがゲームセンターになっていて、最も白
高の学生がたまりやすい場所でもある。

「人混みすぎ！　どんだけ放課後満喫したいんだよ」

「そう言ってるうちらだって満喫しにここ来てるじゃん」

「人を憎んで罪を憎まずってのがセオリーだから」

「てか煙草の煙が鬱陶しい」

あれこれと文句を言いながら、ガチャガチャうるさいゲームセン
ターをつつきつて、大量のプリクラ台が追いやられている西の壁際
に行った。いつも使っているプリ機が使用中だったので、短気な私
たちは「別のところ使おう」とさっさと移動を開始する。

嫌な予感、というものは往々にして当たるもので。

えらびなおした別のプリ機はちょうど「撮影中」のランプが消え、
中から人が出てくるところだった。ラッキー、と思ったのもつかの
間。

目隠し用のシートをくぐり、ピンクまみれでキラキラ飾られてい
るプリクラ台から出てきたのは、我が高校の男子の集団だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8904i/>

春に降る雪

2010年11月24日06時20分発行